



理事長便り

理事長 伊藤栄敏

2026年
6月



BEFORE



AFTER



駅前広場完成への長い歩みと感慨

変わりゆく街、変わらない想い

調布駅前広場完成に寄せて

先日、所用があり調布市役所を訪れた折、久しぶりに調布駅で下車しました。駅前に広がっていたのは、この三月に完成したばかりの駅前広場であり、多くの人々で賑わうその光景に、思わず足を止めました。振り返りますと、この場所は2012年8月19日の京王線地下化から約13年半（工事着手は2004年）、さらに広場整備事業としては2014年の事業認可からおよそ11年半という長い年月を経て、ようやく形となったものです。

調布駅周辺では、布田駅・国領駅とともに鉄道の地下化が進められ、京王線と相模原線の18か所の踏切が解消されました。かつての地上駅舎や鉄道敷跡地にはトリエ京王調布が建設され、街の景観は大きく様変わりしました。こうした一連の変化は、単なる施設整備にとどまらず、人の流れやにぎわい、さらには街の魅力そのものを大きく引き上げるものであったと感じています。

私自身、市役所に奉職して以来、この駅前の移り変わりを間近で見えました。かつての駅前広場では、噴水のある池の周りで若者たちが待ち合わせをし、南側の通称「たこ公園」では子どもたちが元気に遊んでいました。また、商工まつりの「びっくり市」では多くの来場者で賑わいましたが、その一方で自転車の整理に追われたこともありました。2019年のラグビークラウドカップでは、パブリックビューイングに世界各国から訪れた観客が集い、ビール片手に声援を送る光景が広がっていました。これらの記憶は、今も鮮やかに心に残っています。

こうした街づくりの過程において、私も周辺道路の用地取得などの都市整備や商業活性化

といった業務に携わってきました。目の前の一つひとつの仕事は決して派手なものではなく、ときに地道で時間のかかる作業の連続でした。しかし、それらが積み重なり、関係する多くの人々の努力と結びつくことで、やがて街の姿となって現れます。そのことを、今回完成した駅前広場の光景が何よりも雄弁に物語っていると感じています。

もっとも、この完成は終着点ではなく、新たな節目にすぎません。駅前広場に面した総合福祉センターは来年度に移転が予定されており、グリーンホールの在り方についても検討が進められています。街は常に変化し続けるものであり、次なる発展に向けた歩みはずでに始まっています。

こうして振り返りますと、街づくりに限らず、産業振興であれ福祉であれ、あらゆる仕事は多くの時間と多くの人の手によって成り立っていることに気づかされます。一つひとつの営みは小さくとも、それらが積み重なることで社会が形づくられ、人々の生活が少しずつ向上していきます。その実感は決して一朝一夕に得られるものではありませんが、確かな手応えとして心に刻まれています。

だからこそ、今、目の前にある仕事に真摯に向き合い、一つひとつを丁寧に積み重ねていくことが何よりも大切であると考えています。すぐに成果が見えなくとも、その努力はやがて誰かの暮らしを支え、街の未来を形づくる礎となります。目に見える大きな成果の背後には、数えきれないほどの小さな積み重ねがあります。この駅前広場の完成にそのような感慨を抱くのは私だけではないと思います。